



都市景観

未来への大いなる遺産



「景観」ということばがしばしば使われるようになったのは1980年代頃からであり、一般に定着したのは、おそらく1990年代に入ってからであろう。ことば自体は古くからあるが、専門用語として風景、景色という日常的なことばと区別して用いられるようになったのは最近のことである。そこで本稿では、「景観」とは何かという初歩的な考察から発し、歴史にみる都市景観、わが国の景観意識と景観行政、未来への遺産（展望）に至るまで、「都市景観」を主体に概説してみる。

景観—環境の視覚的要素

景観ということばは、おおむね景色やながめということばと同列に使われていた。そのほかに「自然と人工物が入り混じった現実のさま」といった意味があるとする定義もあり、自然物からのみ成り立つ景色から人工物を含む景色を区別するニュアンスがあった。こんなところから自然の風景と人工の風景が入り混じっている景色を示す地理学用語のLandschaft（ドイツ語、英語ではLandscape）に景観という訳語を当てたものと思われる。

地理学上の用語「景観」の概念では、自然の風景の中に配される人工物を自然に影響を与える要素として位置付けている。

その後、地理学でいう景観とは意味合いが異なり、景観を「自然」ではなく「人間」に影響を与える要素として捉え、これを積極的にコントロールする対象とする考え方が出てきた。言いかえると、景観が人間に与える効果を理論的に研究し、これをあらかじめ施設や構造物の計画や設計に織り込もうという考え方である。

こうして、景観の概念は地域開発や都市計画などの重要な要素として注目されるようになったのである。

その背景には、20世紀後半に世界的に表面化してきた環境問題がある。日本の環境問題は、当初は工場排水による水質汚染に端を発して、大気汚染、土壌汚染など環境の汚染が主としてして問題にされてきた。さらに、開発が盛んになるにつれて、これに騒音問題や環境の破壊が加わった。すなわち人間の身体への健康への影響から、人間の心理や精神への影響を含むより広範な問題として論議されるようになったのである。

景観には歴史的、地域的、文化的、資源的といったさまざまな側面があるが、日本で今日景観がクローズアップされているのは、景観の保護あるいはさらに進んで環境美化を促進する要素としての重要性が特に強く意識されるようになったからである。

世界の都市景観

工学上の観点からの景観は、都市景観、街路景観、道路景観、港湾景観、河川景観、臨海景観など操作対象別に細分される。また橋梁景観とかダム景観、トンネル景観といった個々の構造物の種類に沿った分類もある。さらに視点を変えて、鉄道、街路、高速道路等を移動中の乗り物から見た動的景観と静的視点からの静止景観と分けて、論議する考え方もある。

観点によってさまざまな分類があるのだが、本号の特集のテーマである都市景観については、かつてわが国経済が日の出の勢いの頃は、関連分野の識者の間には「経済一流、景観三流」

と評する向きもあった。現在は経済は翳った反面、景観は改善がやや進んでいるものの、先進諸国、特にヨーロッパ諸国の都市と比べるとまだかなり見劣りがする感じがある。たとえば街全体が美術館のような感さえあるパリはヨーロッパを代表する都市景観の華である。古代

ローマの遺跡が街の一部として息づいているローマの景観も世界中の人々を魅了する。中部ヨーロッパには中世の宝石と賛えられるドイツのローテンブルクをはじめ中世のたたずまいを今に伝えるお伽の国を思わせるような美しい諸都市が点在する。ユニークな水の都ベニス、サラゼンの侵攻に備えて築かれたコートダジュールの山岳都市エズ、サラゼン文化の影響を色濃く受けたスペインの諸都市等々、思いつくままに挙げただけでもヨーロッパにはそれ自体ひとつの資源として価値をなすようなすぐれた景観の都市がふんだんにある。このような観光名所ならずとも、ヨーロッパを旅していると、片田舎のどんな名もない街もそれなりの美しい景観を備えていることに感銘を受ける。

ヨーロッパの都市景観が人に感銘を与えるのは、それぞれに古い歴史、固有の文化によって裏付けられているからである。このような歴史と文化を共通項とする都市景観はヨーロッパだけのものではなく、日本にも京都や奈良があり、小京都と称されるような都市は質においてヨーロッパに劣らない景観を形成している。また、かつて江戸を訪れたヨーロッパ人の見聞録には、その街並みの魅力を賞賛する記述も残されている。その見方には異質なもののへの驚きと興味という「エキゾシズム」が含まれていたであろうが、その点を割引しても、当時の江戸の街並みはヨーロッパ人の目からみても感興をそそるものであったと思われる。

ピラミッドの景観を誇るエジプトのカイロ、東ローマ帝国以来のカソリック様式とイスラム様式の混交が特異な魅力を生み出しているトルコのイスタンブールなど非ヨーロッパ世界にも一大景観都市は存在する。さらに、アテネのパルテノン、カンボジアのアンコールワット、南米の古代インカの諸都市など、か



ハイデルベルグの旧市街[上]とローテンブルグの街並み[下](ドイツ)



ヴェネチアのグランデ運河（イタリア）

つてはすぐれた都市景観の一部をなしていたであろう遺構をいくらかでも挙げる事ができる。

しかし、非ヨーロッパ型の都市景観は概して散在していたり、部分的な存在であったり、あるいは遺跡であったりする。これに対してヨーロッパでは、至るところにすぐれた都市景観があり、街ぐるみであり、しかも現代に生きている。このような違いが生じた大きな理由は3つほど考えられる。

● 石造と木造の差

特に日本の場合と比較してヨーロッパの都市景観を構成する構造物は石造りで、経年劣化を受け難く、よく保存されていること。

● 文化価値の認識の差

西欧においては文化的価値という価値観が早期に形成され、景観を保存しあるいはコントロールしようとする意思が為政者レベルでも民衆レベルでも早くから働いていたこと。

● 経済基盤の差

ヨーロッパの主要国は産業革命に成功し、また、世界に植民地支配を広げることによって飛躍的に豊かになり、インフラ整備を行い、美しい街づくりを可能にする財政基盤をいち早く獲得できたこと。因みに今のパリの美しい街並みは、そうした時代、ナポレオン3世の治世下、パリ大改造計画によってつくられたものである。

鉄が可能にした新たな都市景観

「文明の森林」—マンハッタンにそびえ立つ摩天楼群の形容である。これまで、歴史あるヨーロッパの都市景観について触れてきたが、文明の世紀、20世紀はヨーロッパの伝統的なそれとはまったく異質の都市景観を創り出した。画一的な高さのヨーロッパの街並みと対照的に、高さを競い合いつつ林立する摩天楼のスカイライン、中空に星のような無数のきらめきを灯すその夜景。マンハッタンの超高層ビル群は、遠く古代文明に端を発し、中近世から現代にまで受け継がれてきたヨーロッパ的都市景観とはまったく異なる新しい都市美を定着した。



アンダルシア地方の白い町カサレス（スペイン）

高層ビル群がビジネスセンターやダウンタウンを形成し、郊外に住宅地が展開するというアメリカの典型的な都市構造は、その後ヨーロッパの古都を除く世界の大都市の基本パターンとなりつつある。

この新しい都市景観を可能にしたものは、何よりも20世紀に飛躍的な進歩を遂げたテクノロジーであり、多くの新しい建築材料であった。その中でも、決定的な役割を果たしたのは鉄鋼である。従来のレベルとはけた違いの巨大な建造物を物理的に可能にしたばかりではなく、ガラスやコンクリートとともに形づくるメカニクで硬質のたたずまいは、古い都市の景観が多かれ少なかれ伝統や文化に根差したその都市固有のものであるのに対し、新興の大都市では万国共通の傾向となっている。

景観への意識の高まり

ヨーロッパ人の目に魅力的に映った江戸の街並みの例のように、前近代のわが国には独自の都市景観が存在していたのだが、決定的な景観の劣化が顕在化したのは近代になってからで、特に高度成長以降なのである。高度経済成長の過程ではあらゆる面で経済性や効率、機能といった要素が優先された。都市計画や地域開発、各種のインフラ構築といった社会基盤の整備も例外ではなく、機能性や耐久性を重視し、審美的な要素にはさほど注意が払われなかったし、後世に残るものをつくるという意識よりは機能的に陳腐化すればスクラップ・アンド・ビルドするという思想が支配的であった。その結果、人間生活を豊かなものにすべき社会基盤の整備が、環境破壊や景観の劣悪化を招く側面があったといえよう。

1980年代頃になると、人々の意識は急激に変わってきた。量的な充足の段階を卒業して、生活の質の問題に目を向けるようになったのである。環境もまたその機能的効用だけでなく生活に潤いを与える側面、人間の感性に訴える側面が強く意識されるようになった。こうして街づくりや地域づくりは、景観を重視した取り組みに向うことになる。同時に、住民の意識の変化は行政に反映され、公共事業においても後世に残し



パリ全景とトロカデロの街角（フランス）

得る美しい景観を創るための投資が積極的に行われるようになってきている。この変化の顕著な例を、東京タワー、レインボー・ブリッジという東京をシンボライズする2つの景観に見ることができる。東京タワーの建設そのものは古いが、ライティング・デザインという手法でイメージチェンジし、レインボー・ブリッジと並んで東京の夜景に新たな魅力を付加している。

また、別の例としては、歩道橋の問題がある。東京都内の繁華街では、景観上目障りな歩道橋を撤去するところが増えてきている。また撤去しないまでも景観を意識したモダンな外観に化粧直した歩道橋も目につく。並木や植栽アクセサリの造成、公園、緑地帯の整備をはじめ、舗装タイル、ガードフェンス、街灯、ベンチといった、いわゆるアーバン・ファニーチャーも増え、総体的にお洒落な変容を見せている。ついこの間までお役所やら公共施設は汚くみすばらしいものと相場が決まっていたのに、今では、往々にしてその街でいちばんきれいなのは市役所や役場、公会堂などである。贅沢という意見もあるが、公共施設にお金をかけて美しくするのは、都市景観の観点からいえば評価されている傾向ともいえる。

景観の客観的・定量的評価

人間の感性はさまざまであり、美というような主観的な感覚を客観評価する共通の基準を見出すことは困難である。しかし、景観をインフラ構築や都市計画に工学上の主題として織り込む場合、景観の客観評価が必要となる。景観をエンジニアリングするには、客観評価、特に定量的な評価を避けて通れない。

そのため、景観に接したときの人の心理反応を項目に分類して、その評価を数値で示す方法がある。過去の実績や実験研究を通じて数値評価が可能となっている項目もある。例としては、「調和感」や「違和感」を背景と評価対象の高さの比を尺度とする方法、「危険感」や「安心感」を観望者と対象との間の距離で測る方法、「威圧感」を対象の高さと前景の広さの比で評価する方法、「顕示感」を対象と視点との距離を変えたときの視線の角度によって数値化する方法などが実際に使われている。しかし、評価の項目によっては数量的に計測不能なものもあるし、過去に使われた評価モデルは存在して

う。

• 観察法

被験者に装着したアイカメラをビデオカメラに接続して観察する方法で、景観に接した際、被験者が景観のどこを注視するか、その回数、時間などを計測して評価尺度とする方法。

• イメージ抽出法

画像や模型を使い、「良し、悪し」「好き、嫌い」などの抽象的言語表現による評価データを多数集め、統計解析する方法。

• 序数評価尺度法

多数の人による順位付けを統計的に解析して評価の尺度とする方法。

• 距離評価尺度法

対象と視点、対象と背景の距離的な大小を計測して、この数値を尺度に使う方法。

• 比例評価尺度法

景観の中に基準点を設けてこれからの距離を尺度として用いる方法。

以上のほかにもさまざまな景観評価の試みが行われ、実際の景観アセスメントは状況に応じ、これらを組合せて行われている。しかし、前提を仮想しなければならないなどの不確定要素も多く、現段階ではいずれも実験的なレベルを大きく超えてはいない。景観をエンジニアリングするのに定量的な評価が欠かせないのは確かだが、客観的で普遍性のある評価技術の確立はまだ多くをこれからの研究に待たなければならぬ。

本格化する景観行政

ここ20年来の景観への関心の高まり、景観工学の長足の進歩に対応して、行政も景観問題を積極的に取り上げるようになった。ヨーロッパの諸都市においてはつとにさまざまな景観政策が実施されている。たとえば、上下水道の地下埋設はヨーロッパの都市に始まったが、20世紀に至ってからの新規ライフ・ラインである電線、電話線等の配線も当初から地下に設けられている。近年、インフラの近代化にともなって無機質な構造物の増大が避けられなくなると、その建造を特定の地域にまとめて隔離するといった措置がとられている。また私人的空



東ヨーロッパの町並み（ハンガリーのブダペスト[左]、チェコのプラハ[右]）

さまざまな都市の景観の中に暮らし、あるいは旅行者として接して、日本の街々は確かに加速度的にきれいになりつつあるというのがおそらく大方の人の

間についても、条例によって建物の敷地面積、間口、屋根勾配、ファサードのデザイン、素材・色彩の統一、建築アクセサリーのデザイン統一、看板広告物の規制・統一など細かい区分にわたる行政当局の景観コントロールが一般に行われてきた。ヨーロッパですぐれた都市景観が維持されてきているのは、住民の意識や価値観から自然的に形づくられたばかりでなく、行政のこのような不断の努力の賜物でもある。

日本における都市景観行政は、景観先進国であるヨーロッパを見習うことから始まった。例えば地区の特性に応じてきめ細かな規制内容を定めることにより、より良い「まち」へと誘導することを目的とした「地区計画制度」が定められている。これはドイツで土地利用計画について定められた「地区詳細計画」と呼ばれる制度をモデルとして、都市計画法や建築基準法に導入したものである。具体的には、従来の「まちづくり」体系では十分対応できなかった地区レベルでの計画的な市街地形成の誘導をめざし、「まち」を、今後どのように育てていくのか、その基本的な方針を住民とともに明らかにし、「まち」の将来像を定め、それを実現させていく上で必要となる「まちづくり」のルールを決めている。そして「まちづくり」のルールを定めた地区内における宅地造成や建築は、このルールにしたがって行われることになる。なお、平成4年の法律改正により、地区計画制度は市街化調整区域にも導入できることとなり、さらに、誘導容積制度や要請制度等が創設されている。

景観関連の制度としては、このほか「建築協定」、「景観形成のための基準指針」などさまざまなレベルのものがある。

「建築協定」は建築基準法に基づいて景観の観点から建築に規制を設ける点では地区計画制度に似通っているが、強制的な制度ではなく住民との話し合いによる協定がベースとなっている。「景観形成のための基準指針」は、公共主導で景観を形成しようというシステムで、都市景観条例・要綱などを制定し、例えば景観形成区域の指定などを行い、景観の維持・向上を目指すものである。

また、景観対策を目標とする民間団体の活動もきわめて活発である。「〇〇の環境を護る会、景観を護る会」や類似のNGOが各地にあり、熱心に運動を展開している。

実感するところであろう。官民挙げての景観への意識や実践の顕著な高まりが目に見えて成果を挙げてきているのである。

未来への大いなる遺産

景観の形成は一朝にして成るものではない。根底にあるその地域の風土や伝統によって育まれてきた固有の文化や生活が歳月の積み重ねで醸成され、個性ある雰囲気をかもし出すのである。景観工学の進展によって、これからの都市景観はあらかじめ入念に検討され、計画的にコントロールされていくだろうが、造形的に美しい環境を用意するだけでは十分とはいえない。人々がそこで心身ともにくつろぎ親しめる快適な生活空間をつくるのが望ましい。都市景観もそうした目標の一環でなければならぬわけで、それにはさまざまなフィールドの技術を複合した多重的な取組みが必要となってくる。

このような多重的なアプローチは、アーバン・デザインと呼ばれている。それまでの都市計画という概念が2次元の平面設計主体であるのに対し、アーバン・デザインは景観を含む3次元のデザインであり、さらに色彩をはじめそこに生活する人の活動やアメニティーといった要素までを広範に含む意味の用語として使われている。

アーバン・デザインを駆使して創り出されるこれからの都市空間がかもし出す景観は、時代の変転に合わせての部分修正はあるにせよ基本部分においては何世紀にもわたるロングスパンで、人々に受け継がれ親しまれていくべきものと想定される。都市景観とは、個々の建物や施設といったあらゆるディテールを包含した未来への大いなる遺産であるといえよう。

参考文献

- 「絵になる都市づくり」尾島俊雄著 日本放送出版協会刊
- 「美しい都市景観をつくるアーバンデザイン」村 明著 朝日選書刊
- 「景観工学」石井一郎・元田良孝著 鹿島出版会
- 「景観用語事典」篠原 修編 景観デザイン研究会著 彰国社刊
- 「建築・まちなみ景観の創造」建設省住宅局建築指導課・市街地建築課監修 建築技術教育普及センター・全国市街地再開発協会編 建築・まちなみ景観研究会著 技報堂出版刊
- 「誰がバリエをつくったか」宇田英男著 朝日選書刊
- 「東京都都市景観マスタープラン」東京都編 刊
- 「都市はいかにつくられたか」鯖田豊之著 朝日選書刊
- 「街並みの美学」芦原義信著 岩波書店刊

[取材協力・写真提供：フランス政府観光局、ドイツ観光局]